

情動表出とイントネーション： ドイツ語において

富永 晶子

京都大学大学院

break.run.out9@gmail.com

キーワード：ドイツ語、イントネーション、情動、ピッチ曲線

1. はじめに

人間の情動の種類は喜び、怒り、悲しみ、楽しみなど様々である。コミュニケーションにおいて、情動を他者に伝えるのはしばしば困難な局面に陥り、的確な意図を伝えることは難しい場合がある。発話において語彙や文法は間違っていないのに、話者が醸し出そうとしているニュアンスが伝わらない場合があり、それは情動と言語音の表出の関係に起因する場合が少なくない。つまり、韻律的特徴（プロソディ）であるアクセント、イントネーション、リズムなどや声の高さ、長さ、強さで表される音声の要素が的確に付随されることによって、よりスムーズなコミュニケーションが期待できると考えられる。イントネーションとは、発話の流れに沿って生じる音の高さ（ピッチ）の変化であり、ピッチの上昇、下降、平板とそれらの組み合わせによって構成される。どのような言語においても、発話が終始同じ高さで実現されることはない。話し言葉において、発話の中で音の高さが変化して独特の高低のメロディーが産出されており、言語運用に重要な役割を果たしている。本稿はドイツ語のプロソディの中でもイントネーションに照準を絞り、ある任意の情動がどのようにイントネーションに表出されているか考察するものである。先行研究では、例えば Grice et al. (2005: 71-72) にて、簡単な文脈と共にドイツ語のアクセント型が述べられているが、一般的に用いられるアクセント型を示したものであり、情動に焦点があてられたものではない。情動が表出されたイントネーションの一般化に焦点を当てた研究は困難であろうが、ドイツ語の音声教育の面では必要な領域であろう。

2. ドイツ語のイントネーションサンプルの収集と分析の方法論—

本稿においては、分析の際に押さえておくべき 2 つの重要な観点がある。1 つは、イントネーションを表す際に、サンプルを区分する「意味的水準」の概念とその定義である。もう 1 つは、サンプルの均衡性、およびサンプルを発音する母語話者であるインフォーマントの役割である。

2.1 「意味的水準」の概念と定義

意味的水準とは、サンプル文を区分する、ある一定の概念の集合体をいう。ある特定の発話状況のもとで、発話者が、ある特定の意図から発話する際の情動から意味的水準を構築するということである。

A 群：発話者がある特殊な情動を持たず、辞典的語義に忠実に情報内容を伝達した文および句。これを「単純」の概念でくくり、4つの文型で表記する：

1. 単純肯定
2. 単純疑問
3. 単純否定
4. 単純命令

3と4の型は本論で事例として登場しない。「単純」とは例えば、本論で多く活用する単純肯定型で言えば、いわゆる肯定形で表す発話であるが、ここでの肯定形は、他の3つとの対照において、平叙文や叙述文を内包した文型全般を指す。疑問文に *ja* で答える肯定文の「肯定」のみを含意するのではない。

B 群：発話者が、時と場と様態に依存して、発話者の特殊な意図で発話する文および句。この定義による情動 (情緒感覚) は9つのカテゴリーで代表される。

- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. 「憤懣」 | 強い反発・抵抗から憤る発話 |
| 2. 「無関心・冷静」 | 意図的に無関心あるいは冷静に装う発話 |
| 3. 「強制・脅し」 | 相手に受け入れるよう強いる発話 |
| 4. 「不満・不信」 | ネガティブに疑い満足しない発話 |
| 5. 「驚き」 | ポジティブに意外と思う発話 |
| 6. 「期待・頼み」 | 実現されるよう願う発話 |
| 7. 「満足・納得」 | ポジティブに満足または納得する発話 |
| 8. 「自信・誇り」 | ポジティブに事態・事象を力説する発話 |
| 9. 「冗談・皮肉」 | 冗談またはポジティブな皮肉の発話 |

上述から分かる通り、意味的水準の B において、9 分類で人間の情動が完璧に網羅できるはずはない¹。強調すべきは、AB の諸カテゴリーは、後述する原資料である映画から収集したサンプルに基づいていることである。ここで説明しておかなければならない重要な前提がある。A 群の発話は、発話者のある特殊な情動から伝達された情報でない。これに対して、B に属す概念定義における発話者のセンテンスは、個々人の言語に対する個人的感覚の表象という意味ではなく、発話が一回性のものであり、発話者の情緒感覚と発話状況が代理を許さない。つまり、A と B を分けるサンプル判断は、発話者の情緒感覚と様態・場・時の発話状況が合わさって実現した「音」にある。そのため、語用論的なコミュニケーションを重視してサンプル文を選出することが重要である。サンプル群をある規定の方法論において測定し、A と B の各区分

の 카테고리内においてインフォーマント同士に同様のイントネーションが認められるのか、それとも当該 카테고리内においても段階的な相違が認められるのか、もし違いがあるならばその理由はどこからくるのか、また A と B の各区分の 카테고리同士にも違いが見られるのか等を考察するというアプローチを採ることで、先行研究にはない新たな視点での論を展開できると考えられる。

2.2 インフォーマントの役割

もう 1 つの別の観点がある。つまり、サンプルの均衡性、およびサンプルを発音する母語話者であるインフォーマントの役割である。まず、サンプルの均衡性について述べる。イントネーションを研究するにあたり、次の 2 本の映画を選択した。1 つは *Pünktchen und Anton* (点子ちゃんアントン)、もう 1 つは *HILDE* (ヒルデ) である。映画を採用した理由は、日常会話の自然な言葉の中にサンプルを求めることが出来ること、さらにその際の日常会話は、自明のことながら、発話意図をより正確に伝えるイントネーション作動が実現しているものでなければならないからである。この 2 本は会話が多くあり、2 つの作品を検証した結果、セリフはイントネーション論を考察するうえで言語科学的に客観的な保証を獲得できる意味的水準を達成していること、また情動の分析に偏りのないセリフのテキストであるということが判ったのでサンプルソースとして採用した。一方は Erich Kästner による有名な文学作品が原作で、もう一方は、歌手であり俳優であり作家であった Hildegart Knief の生涯を扱ったものである。サンプルの均衡性に配慮して、ストーリーと俳優のコントラストも考慮に入れた。*Pünktchen und Anton* は、幼い女の子と男の子を主人公にしたヒューマンストーリーであり、*HILDE* は、ナチ時代からベルリンの壁頃までにわたるドイツの難しい時間と環境の中で、エンターテイナーとして地位を獲得していく大人の女性の人生模様をシリアスに描いた作品である。このように、物語内容と俳優の年齢層や男女比にバランスが取れるように配慮した。

次に、サンプルを発音する母語話者であるインフォーマントの役割に移る。映画を採用するメリットは、多彩な登場人物のセリフに様々な発話意図が割り振られていることであるが、本研究ではさらにイントネーションの実態を多角的に体系的に捉える可能性を求めて、インフォーマントとしてドイツ語母語話者に協力を依頼した。1 つの事例でその意図を説明する。*Hat sie das nicht gesagt?* (奥さんはそれを話してなかったということですか?)² は、登場人物の Hilde がレコーディングで歌った歌の歌詞を彼女自ら作詞したことを夫が初めて聞かされたことを知って、録音者が驚く場面である。したがって、この文は意味的水準の「驚き」に分類される。しかし、もちろん *Hat sie das nicht gesagt?* を、事実確認を求める単純疑問型の文形態で捉えることもできる。驚きの情動と単純疑問型では、イントネーション作動に違いがあることが容易に想像できる。そこで、映画の中で驚きに分類される *Hat sie das nicht gesagt?* の文を、単純疑問型として母語話者のインフォーマントに読み上げてもらうことで、意味的水準の各カテゴリーのイ

イントネーションを相対比較することが可能になる。このような場合の文同士におけるイントネーション作用の有り様を検証することにより、そこに共通性や異質性、矛盾がピッチ曲線となって表れると考えられる。それらを論理的に体系化できるならば、ドイツ語を「音」の面から習得できるイントネーションの実態を把握できる。

3. ピッチ曲線の考察

音声サンプル収集には母語話者2名の協力を得た³。Herborn⁴と Köln 出身の20代女性である。母語話者には各サンプルの発話意図を理解してもらった上で、標準ドイツ語で発音してもらった。今後は前者のインフォーマントを IA、後者を IB とする。

3.1 情動カテゴリー：憤懣

(1) Er ist trotzdem dein Sohn! (それでもあの子はあなたの子でしょ！)

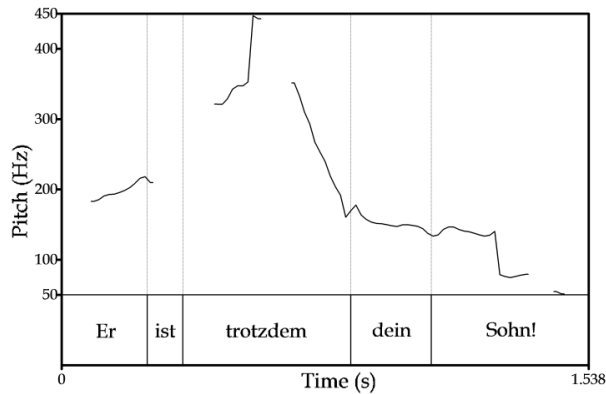


図1 憤懣のピッチ曲線 (IA)

考察に先立ち、図の中の英語と数値を略述する。縦軸がピッチで、単位は (Hz)、横軸は経過時間で単位は秒 (S) である。なお、図サイズと紙幅の関係から、図2以降は縦横軸の見出しを略す。「憤懣」の全16サンプルの内の14個において、両インフォーマントは類似したピッチ曲線を示した。図1の事例は、幼い息子(アントン)のためのお金を渋る父親に対して母親が憤懣する情景である。主な特徴は、(i) 高いピッチピーク、(ii) 広いピッチレンジ、(iii) ピーク型である。「高いピッチピーク」という評価は、ピッチの最高値が350Hz以上を示すものである。「ピッチレンジ」は、特定の時間区間におけるピッチの最小値と最大値の幅を意味する。これが広いとは、最小値と最大値の差分が250Hz以上をさす。「ピーク型」は語内または音節内における200Hz以上の急激なピッチ上昇または下降、ないし上昇プラス下降を表す。なお、これらの概

念および数値評価は、筆者が検討した全 324 サンプルから、IA と IB の声の高さやアクセント位置の高さを考慮に入れ、相対的に設定した値である。こうした設定基準により、イントネーションの特徴がより具体的に記述可能になると期待できる。図 1 ではピークの高さが 450Hz、ピッチレンジは約 50Hz から 450Hz の間という 400Hz の大きさであり、またピーク型は *trotzdem* のピッチ曲線で判断した。ただし、*trotzdem* ではなく心態詞 *doch* でも同じ意味形態になるが、その際にはピッチピークは *Sohn* に来ると想定されるので、自明のことながら、音的要素と音節数に密接な関係があると推察される。

3.2 情動カテゴリー：無関心・冷静

(2) Ja, wie geht's dir? (ねえ、元気にしてるわね。)

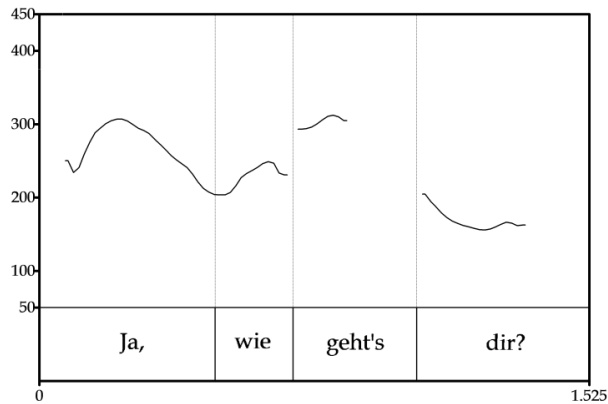


図2 「狭いピッチレンジ」の冷静のピッチ曲線 (IA)

「無関心・冷静」は、全 16 サンプルが狭いピッチレンジ (5 例) と広いピッチレンジ・高いピッチピーク (5 例) に二分された。カッコ内の数字は、全サンプル中の該当する数を意味する。「狭いピッチレンジ」の評価は、特定の時間区間におけるピッチの最小値と最大値の差分が 50Hz から 150Hz 以内の設定に拠る。図 2 の事例は、Hilde が舞台上上がる前に楽屋を訪ねた友人が、Hilde の昔のプロデューサーの死を伝えられず、Hilde によそよそしい挨拶をする場面である。IA がサンプルを単純疑問型の意味的水準で発音したとき、*geht's* に高いアクセントが置かれ (約 380Hz)、ピッチレンジが広く、これに比して、冷静を装う場合のピッチレンジは約 150Hz と狭く、最も高いアクセントが置かれた *geht's* のピッチも 300Hz 周辺である。また冷静の場合、*dir* に抑制が働いていることがピッチ曲線に見て取れる。これらの測定値は、情動の事例がモノトーン (単調) の印象を与えるわけで、冷静を装うさまが発話ストラテジーに具現化されていることを音的に明証する。

「広いピッチレンジ・高いピッチピーク」の事例

(3) Der, der Reue zeigt, dem ist schon vergeben. (後悔の念を示した人はそれでもう赦されるってことなのよ。)

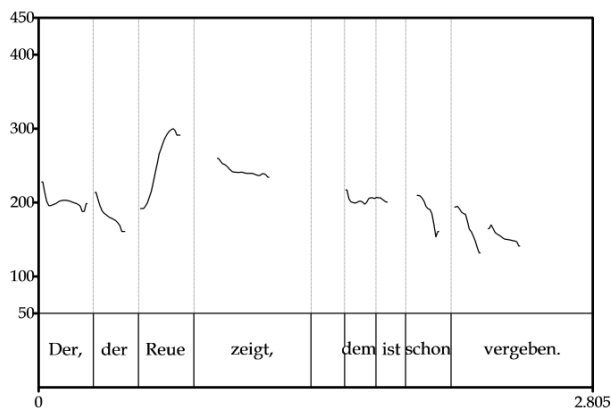


図3 IAのピッチ曲線



図4 IBのピッチ曲線

事例は、仕事第一で子供や家庭を疎かにしていた母親の改心を娘の点子が教訓的な口調でいたわる場面である。2つの図(図3と図4)はIAとIBがひどく相違している。IAは*zeigt*の後に休止が入るにもかかわらず、ピッチが立て直されることなく、そのまま下降する。IBは*Reue*から*schon*までHat patternと*dem*の上昇調のS型を示す。Hat patternはFéry(1993:149)の用語であり、2つの高い音調の間でピッチが降下せずにハット(台地)を描く型を示す。上昇調のS

型は Delattre (1965:25) の用語であり、第1音節にアクセントがあるにもかかわらず、そのピッチ曲線が強く右に傾斜したイタリック体のS形を示す現象である。IA と IB の相違は、イントネーションの音現象が当然ながら発話文の意味・統語上の文法現象に影響されるためと思われる。IA は、図2のサンプルと同じイントネーション態度を反復してモノトーンな冷静の情動を示した(図3参照)。一方、IB は、箴言的な文法現象に音効果を重ねた結果、関係代名詞の文を締めくくる *zeigt* と、主文に先立つ指示代名詞 *dem* に Hat pattern と上昇調のS型を付与したと推察される(図4参照)。

3.3 情動カテゴリー：強制・脅し

「強制・脅し」の情動の全22サンプルはIA・IBによるピッチ数値の相違が大なり小なり認められた。紙幅の都合で、1つのサンプルだけを取り上げ、そこに生じた上昇と下降の対局的なステップ現象を強制・脅しとの関係で分析する。図5の事例は、アントンが点子の家から盗んだライターを母親が戻しに行ったとき、魔がさしただけの悪意のない行為だとかばう母親に点子の母親が諫言する場面である。

(4) Ja, Sie vielleicht, aber Ihr Sohn offensichtlich nicht. (ご自身はそうではないかもしれませんが、お子様ははっきりいって違います。)

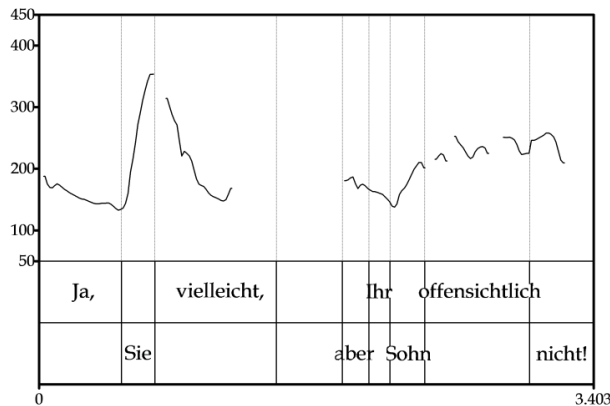


図5 IA のアップステップ現象

*Sohn*以降が低い音節が介在せずに高い音節が続くアップステップとなる。これが単純肯定の文であれば、一ただし、事例の文が単純肯定の辞典的語義に忠実な発話であれ、現実には情動型と大幅には変わらない文意である一後続の音節は、*offensichtlich*の音節 *-sichtlich*以降が *nicht*までゆるやかに下降するであろう。そのように仮定すれば、IAは発話に際して明らかに文の統

語性にイントネーションの個性を投影させた。主語の *Sie* (母親) と *Sohn* (息子) に対する話者の相反する評価を、主観の推測型の副詞である *vielleicht* と *offensichtlich* に体现させ、前者は急激なピッチ下降、後者はピッチの緩やかな上昇の音効果で実現させた。その際に、効果を補うために主語の音節に両方とも上昇ピッチを付与した。断るまでもなく、筆者は強制・脅しが上昇と下降のせめぎあいにより、情動がイントネーションに表象されるなどと述べていない。そのような飛躍した論は文の統語性が激変すれば無効になるためである。そうではなく、IA の音上の個性が、発話文の統語性に着目して、ピッチの上昇と下降のステップをバランスよく構築したことである。人間のイントネーションとはかくも表層上は規律がないようであるが決してそうではないことは今後の論で追補する。「ご自身はそうではないかもしれませんが、お子様ははっきりいって違います。」と例 (4) を日本語で発話したとき、上記の言う主語と主観の推測型の副詞に IA のイントネーション戦略を同じく用いる人がかなりいるのではないだろうか。

3.4 情動カテゴリー：不満・不信

「不満・不信」の情動は全部で 88 サンプルに達した。この情動は、IA と IB のピッチ曲線が大方一致する事例が 50 例、部分的な相似は 12 例であり、この傾向はこの情動に配分するイントネーション現象に一般性が認められたからである。その特徴は、高いピッチピーク (31 例)、広いピッチレンジ (25 例) に該当する例が優勢で、これは不満・不信と隣接する憤懣の情動と同様な結果を示した。その他のアクセント型はピーク型 (14 例)、S 型 (12 例)、ピッチピークの遅れ (10 例)、ダウンステップ (10 例) で過半を占めて分かれた⁵。

(5) Wie alt war die Dietrich, als sie nach Hollywood ging? (君はあのディートリッヒがハリウッドに行ったとき、何歳だったと思っているのだね。)

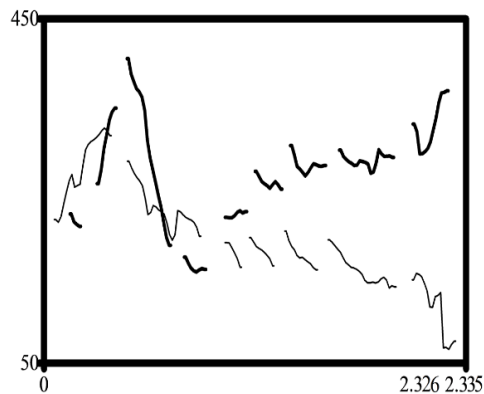


図 6 細線が IA、太線が IB

ここでは、IA と IB において、ある意味の一致とそのピッチ現象の対立という一見矛盾したサンプルを示して不満・不信の一面を検証する。図 6 は 2 人のインフォーマントを比較するために 1 つの座標軸に書き込んでいる。発話時間は実質同じである。サンプルは、年齢を尋ねる意味的水準の単純疑問型でない。Hilde が Hollywood 進出を映画プロデューサーに嘆願するというものであり、プロデューサーに不満・不信の感情を露わにする。Wie alt war die の IA と IB のピッチ曲線は概ね変動パターンが類似している。しかし、ほぼ Dietrich を境に、ピッチ曲線の上下移動の現れ方が好対照となる。IA はダウンステップ、IB はアップステップである。単純疑問であればイントネーションは文末にかけて上昇する。IB はこの意味で単純疑問型に分類される。しかし、主文のアクセントに急激なピッチピークが見られる。その値は同じ傾向を示す IA よりも 100Hz 近く上回る。万人はもとよりイントネーションを完全には同じくしない。まして情動が強くなるほど、例えば不満・不信を惹起する様々な動機に応じて無限数といえるほどに発話者のイントネーションは異なる。それが、ダウンステップとアップステップで「対照」を示すのはごく自然な現象である。むしろ、「対照」が止揚されて調和のとれた「対称」を音的に実現している。即ち、母語話者の間で音の調整上の個性が発揮されて、イントネーション上の「対照」を呈しているが、もしもイントネーション作動が文の構造や意味、そして、何よりも二人の情動上の強度と無関係に無秩序に現われたならば、図 6 が描く調和的な「対称」のピッチ曲線は決して生まれないであろう。アップステップとダウンステップを示した母語話者間にイントネーション作動の一般性がある可能性を示唆している。

3.5 情動カテゴリー：驚き

既述したように、我々のイントネーションは一定の姿形に押し込めることはできない。むしろ、様々なピッチ曲線の測定結果から、音の調和的な秩序を求め、「共通する傾向」を学ぶことが重要である。「共通」とは「同じ姿と形」を意味しない。前項の不満・不信の事例で上昇と下降のステップ対立にもかかわらず、発話文の意味やコンテキスト（情動も属する）などの諸属性が発話者の個性に干渉する、あるいはその逆の諸属性が個性に影響を与える、その結果が上昇と下降の対立を呈した。しかし、その対立が調和的であり偶然でなく、無秩序でなく秩序を保ちつつ、前後の音節のイントネーション現象と継起的に流れている。

「驚き」の情動は、前項の「共通する傾向」が文字通りに認められる稀有なカテゴリーである。紙幅の都合で図を伴うサンプルは 1 つにすぎないが、そのピッチ曲線の姿は、驚きに所属しているサンプルの多数で、IA と IB を越えて、全 12 の情動サンプルに「共通する傾向」を示した。例えば、Wer sind Sie denn überhaupt? (いったいあなたは何者なんですか!) や Hat sie das nicht gesagt? (奥さんはそれを話してなかったということですか!) のサンプルは図 7 と共有するピッチパターンを刻む。図 7 の事例は、登場人物である点子の多忙な父親が、今後は早く帰宅するという反省の色を浮かべた様子に、病気ではないかと妻が意外に驚く情景である。Sag mal まで

200 Hz 付近から下降するが、*mal* の後は休止を挟まず、文末まで一気に発話され、平板な *bist du* を経て、最後の *krank* の音節内では 400Hz 以上まで上昇する。この現象は上記の 2 サンプルにおいても、400Hz 付近と 300Hz 以上の急激な上昇としてみられる。この急カーブは、同じく IA が発音した単純疑問型のピッチ曲線と比較すると明瞭になる。単純疑問の意味的水準では、文全体のイントネーションはおおよそ平板で、*mal* の後に長い休止が入り、*krank* のピッチピークも 270Hz しか上昇しない。このように、驚きの情動をもって発話した場合、単純疑問型の文末のピッチ曲線の平均値をはるかに上回る上昇が「共通する傾向」として実測される。しかし、これも我々の日本語を考えると納得できる体験をしている。重要なのは納得できる感覚を明証することであり、驚きの情動はそれを幾分か果たしたと思われる。

(6) Sag *mal, bist du krank?* (あなた、病気だったの！)

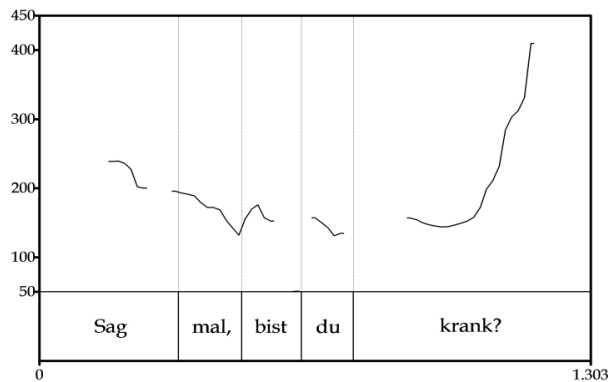


図 7 驚きのピッチ曲線 (IA)

3.6 情動カテゴリー：期待・頼み

全サンプル 30 例のうち、狭いピッチレンジ (11 例)、高い帯域で止まる文末音調 (8 例)、高いピッチピーク (7 例) の 3 つの現象が主流である。ここでは、「高い帯域で止まる文末音調」に絞って、「期待・頼み」とイントネーションの相関関係を検証する。図 8 は、父親を捜しに行こうと騒動を起こしたアントンが母親にむしろ叱ってほしいとするセリフである。*böse* において 280Hz ほどの一番高い音域で上昇もせず下降もせず曲線が一定を保持する。この高い帯域で止まる文末音調が、期待・頼みの全サンプルの 3 割弱を示す事実は「共通する傾向」として定めてよいのかについて議論は避けここは先に進む。文末の高止まり現象は、単純疑問の意味的水準の発話ならば、図 8 が示すピッチ曲線の全体像は見込めない。発話文の意味上、*böse* が一番高い音域になることは同じであるとしても、ピッチピークが 280Hz にまで上昇しないし、何

よりも単純疑問型の定理にならって *böse* の音節内でアクセント移動が生じるに違いない。単純疑問型では高止まりにはならない。翻ると、鍵を握る *böse* に話者が高い帯域で止まる文末音調を付与することで、期待・頼みの情動を託したと分析してよいであろう。筆者は日本語の場合の期待・頼みを比較対象の念頭に置くのであるが、ここになによりも日本語とドイツ語の統語上の条件が干渉する。日本語では *böse* の部分が発話の文末に来る統語構造ではないが、この「くれているのだよね」に、日本語でも高止まり音調が割り当てられるかどうか実験することは有益かもしれない。ここに、イントネーションの扱いには、統語上の環境が作用要因の1つであるという事実を確認できるのである。

(7) Bist du mir jetzt sehr böse? (母さん、僕のことを怒ってくれているのだよね。)



図8 期待・頼みのピッチ曲線 (IA)

3.7 情動カテゴリー：満足・納得

本情動は全 28 サンプル中、IA・IBとも類似した特徴をもつ事例が 16 を数えた。これを「共通する傾向」とみなせるかどうかはイントネーション考察の本質ではなく周辺部に過ぎない。ここはピッチレンジの狭いサンプル (10 例) と広いサンプル (6 例) の対立を組上に載せることにする。その際には同一のサンプルにおいて IA・IB が対立した場合に論証が際立つ。図 9 と図 10 が考察対象のピッチ曲線である。事例は、母親が仕事で長く家を空けていることで孤独を感じている点子に対し母親が述べる場面である。繰り返すがイントネーションの実態は、人により、文により、そして肝心な情動の度合いにより千差万別の様態を産出する。ピッチレンジの幅もまた例外でない。例えば、同じ情動であるサンプル、*Die haben sich lieb.* (あの 2 人は好き者同士なのよ。) は、IA・IBともピッチレンジが 200Hz から 260Hz 程度しかない。他の情動と比べてモノトーンな本イントネーションは、多分に統語上の単純さやごくありふれた文メッセー

ジの日常性が話者をして測定値を近似させると考えられる。ところが、組上に載せたサンプル文は、文の長さ、*und*の重文による統語の意識的反復が、IAとIBの間でイントネーション上の個性を刺激させたに違いない。IAは低い帯域から始まり、全体を通して低い音調が支配する。*uns*でわずかにピッチが上昇するが、それでも、*und*以降は後続のピッチがモノトーンなほど平板を保つ。

(8) Du hast uns und du hast ein wunderbares Leben. (あなたには私たちがいるし、明るい生活があるわ。)

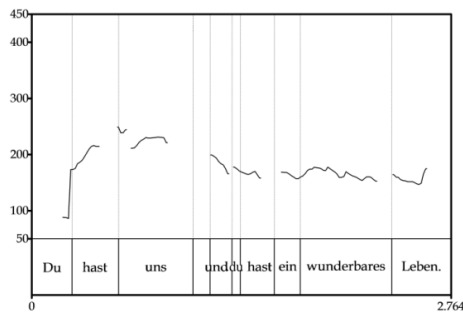


図9 IAのピッチ曲線

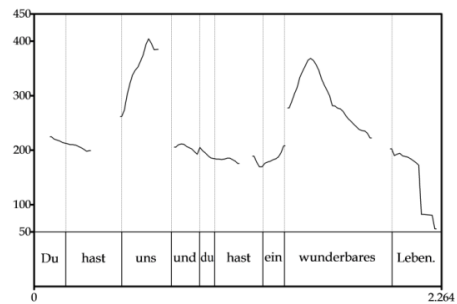


図10 IBのピッチ曲線

これに対して、IBは、ピークが高く、ピッチレンジも広い。*uns*の後の休止も置かないまま、*uns*に400Hz、*wunderbares*に360Hzの高さを配置させる。言わば、どっしり構えたピッチのピークを強調し、また、*Du hast*と*und du hast ein*のピッチを200Hz周辺まで下降させ、最後は50Hzという低い帯域で終わる。メリハリの利いたイントネーションである。IAは単純でありふれたDie haben sich lieb.とさして変わらぬ発話態度で反応した。確かに、この文よりはるかに長めの文であるにしては、統語上の単純さと文メッセージの日常性のグレードはさして変わりがいと受け止めることができる。その結果がピッチレンジの狭さという個性をIAに導かせたのであろう。他方、IBはDie haben sich lieb.をはじめととするサンプルでIAと同調したにもかかわらず、図のサンプル文を単純な統語とありふれたメッセージであるとしなかった。特に、*uns*と*wunderbares*にピッチピークを付与した。その結果がピッチレンジの広さに現出したのであろうと推察される。IBは発話のとき、情動作用に発話文の言語的コンポジション (linguistische Komposition) が鋭く干渉する感覚に襲われたのであろう。

3.8 情動カテゴリー：自信・誇り

「自信・誇り」の情動は全部で26サンプルある。IAとIBのピッチ曲線が、他の情動カテゴ

リーと比較するとかなりの程度に近接する事例が目立つ。2本の映画作品から抽出された本情動のサンプルはなぜか短文に集中する。偶然なのか、人は自信や誇りを胸に抱くときは饒舌に語らない、あるいは、饒舌を短文で構成する傾向があるのかもしれない。以下のサンプルを見ると、確かに短文形式は自信・誇りに親しむように思える。(和訳は平易なものであり省く。)

(9) Weil ich begabt bin. / Wer ist Hildegard Knef? / Das hier ist Hildegard Knef.

(10) Warum nicht? / Ich kann immer auch „Nein“ sagen. / Ich weiß es eben.

(11) Mein Baby. Mein großes, kleines Baby. / Ja, natürlich. / Na logisch.

この中から Wer ist Hildegard Knef? に焦点をあてて論を進める。その際に、IA と IB の測定結果を1つの図に再現させる。発話の時間経過が当然に両者は異なるので、発話が完了する時間をそれぞれ表記する。図11が情動型、図12が単純疑問型である。

(12) Wer ist Hildegard Knef? (私 Hildegard Knef とは皆さん、どういう人間でしょ。)

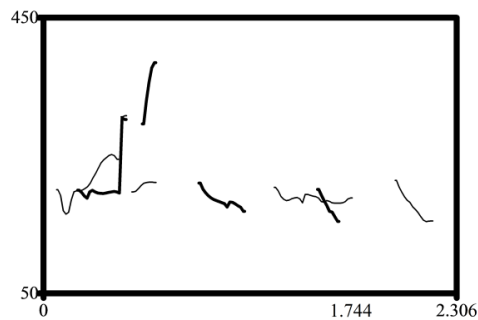


図11 情動型 (細線: IA 太線: IB)

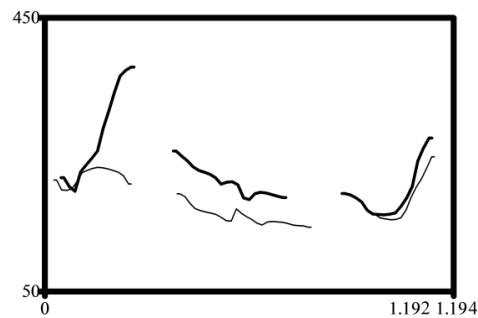


図12 単純疑問型 (細線: IA 太線: IB)

和訳は情動を掴むことができるように敢えて意識している。女優のポジションを確立した彼女がステージから観衆に矜持を示す場面であり、当然に観衆は女優を知悉している。単純疑問の「Hildegard Kniefは誰でしょうか?」と根本的に伝達意図が違う。情動型と単純疑問型の間には語用論上の大きな隔りがある。図11において各4本のピッチ曲線から即断できる事実の最初は、IAとIBの両者が近似値を提供していることである。注目すべきことは、情動型において、両者の時間経過が異なるために見ピッチ曲線が異なる印象を持たせるが、実際は同じという点である。太線の左から3番目はHildegardの部分であり、その語彙は細線の右から2番目に対応する。同様に、太線の最後の長い曲線は、細線の最後、すなわちKniefの部分に対応する。その結果、事例の文全体が両インフォーマントにおいて、情動型・単純疑問型とも発話の最初から最後までピッチ曲線がほぼ重なる。精密に検証すると*wer ist*の音節群が異なる外見を与える。しかし、単純疑問型の*ist*は発話速度が速くほとんど省略されていたためIA・IBともピッチが計測されず、情動型の*ist*および両方の型の*wer*はピッチの高さ、つまり、ピークとそこに到るまでの傾斜角度の値が異なるに過ぎない。しかも、傾斜は両者とも上昇であることでここも同調する。

結論として挙げられるのは、まず、単純疑問型において、ドイツ語を母語とする2人のインフォーマントは、単純疑問文のイントネーション規則に則るピッチ曲線を呈した事実である。これはおそらく被験者の2人だけでなくドイツ語の母語話者にも敷衍できるであろう。こうしたイントネーションに関わる言語学的規則が図12によって明証された価値は重いと考える。次に、自信・誇りの情動型においては、同じく図11が示すように「共通の傾向」を描いた。当該サンプルは共通性を模範的に示したのであるが、本情動の残りのサンプルにも有効であることを筆者はデータ化している。しかし、幾度も強調しているように、ピッチピークやピッチレンジ、上昇下降の線状形態等々が、インフォーマントによりずれが生じる、あるいは、特定の音節部分で対立、例えば、一方は上昇カーブで他方は下降カーブであることは、図11を詳細に眺めると分かる。しかし、この「対立」もまた、他の情動の際に強調したように、そこに秩序なき対立をしているのか、それとも秩序ある調和的な対立をしているのかで「対立」の質が異なる。自信・誇りの情動型は図11のサンプルを先頭におしなべてIAとIBにおいて鋭く近接し、「対立」の局面もまた調和的な秩序を保つ。

かくして、ドイツ語の母語話者に関する限り、自信・誇りの情動がある場合、発話はその文の終結へ向けて、発話冒頭の音節部分でピッチピークを迎え、その後は下降のイントネーションで終わることが想定される。そう考えると、我々は日本語において自信や誇りを心に抱いて発話するとき、ドイツ語の母語話者とイントネーションを共有するのではあるまいか。もしも、文頭周辺でなく、文末にピッチピークを付与した場合、自信・誇りの印象を話し相手に与えず、自惚れやその反対の蔑みの誤解を与えてしまうのではあるまいか。

3.9 情動カテゴリー：冗談・皮肉

我々が冗談や皮肉を言うときの立ち居振る舞いは2つに大別できると考えられる。喜怒哀楽を冗談や皮肉を纏って大胆もしくは大袈裟に振る舞う「劇場型」と、淡々と独白調に振る舞う「ポーカーフェイス型」である。その際の発話される冗談・皮肉な言葉のイントネーションはピッチの高さも幅も、そして、上昇・下降・平板の様態も随分と異なるだろう。

冗談・皮肉の情動サンプルは46例抽出できたが、そのピッチ曲線はポーカーフェイス型が優勢である。すなわち、狭いピッチレンジ(17例)、文末の平板傾向(16例)である。これは映画の2作、*HILDE*は成熟した女の紆余曲折の人生を静謐に回想する場面が多くあり、*Pünktchen und Anton*の2人の主要人物は子供であるが、どこか大人びた面を持つからであろう。作品の趨勢が劇場型であるならば、測定されたピッチ曲線は結果が対照的になりえる。事実、そういう測定値を見せる事例が認められた。高いピッチピーク(13例)である。したがって、冗談・皮肉の情動は2大別のいずれを採るかでピッチ曲線が対蹠的になる可能性が考えられる。そういう2大別の条件下でこの情動型を特定のサンプルに託して論述することの是非をここでは問わず論を進める。図13と図14はインフォーマントその人の情動型と単純肯定型を1つの図の中で併記している。

結論は一目瞭然である。両方の図とも情動型と単純肯定型が予見したはるか以上に「共通の傾向」を示す。すなわち、これまでの比較は2人のインフォーマント間であったが、ここは同一のインフォーマントにおける意味的水準の間の「共通の傾向」である。この事実だけでも偶然性を退けるに足る事実であろう。2つのサンプルは十分な長さの発話文であり偶然の重なりとは考えにくい。図13の事例は、点子の歌とダンスのパフォーマンスに対する悪ガキの辻褃の合わない悪態に皮肉を浴びせる場面である。発話意図は「皮肉に反論する口調」である。図14は、見事な歌唱を披露したHildeを前にして感涙する夫が照れ隠しの冗談を放つ。発話意図は「圧倒的な感動を抑制してユーモアたっぷりで紛らわす」である。ポーカーフェイス型の発話である。人は、少なくともドイツ語の母語話者は、ポーカーフェイス型の冗談・皮肉の情動から発話するとき、語義の辞典上の意味に忠実に発話するメッセージ的な単純型に近い波長を好むのであろうか。冗談や皮肉の神髄は、相手には恣意的に響くであろうが、しばらくたって合点するところにある。だとすると、発する側が劇場型では瞬間的に冗談や皮肉が伝達され、それは上質の冗談や皮肉になりにくいのではないか。IA・IBは冗談や皮肉の神髄に銘じて発話したのではあるまいか。考えてみれば、我々日本人も冗談や、とりわけ皮肉を言うとき、単純型の口調で装うことが上質であると悟っている。そのときのイントネーションが、ほかの情動カテゴリーと違い、単純型の路線と軌を一にする事実を日常生活やドラマで経験していると思う。その意味において、図13・14は冗談や皮肉の情動において、1つの普遍的な形を象徴していると考えられる。

(13) Das hast du jetzt aber schön gesagt. (今ごろになってよく言えるわねえ。)

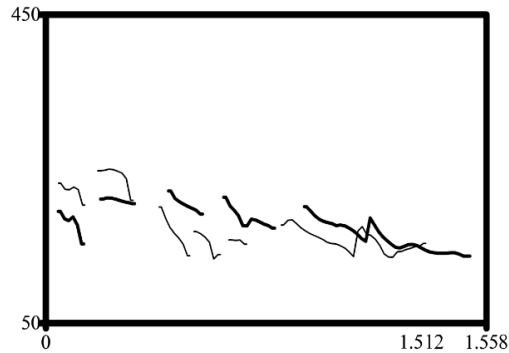


図 13 IA のピッチ曲線 (細線が情動型、太線が単純肯定型)

(14) Heuschnupfen. Tut mir leid. Ich bin gegen irgendwas allergisch. (花粉症でね、すまない。僕にアレルギーを起こす何かがあるのだ。)

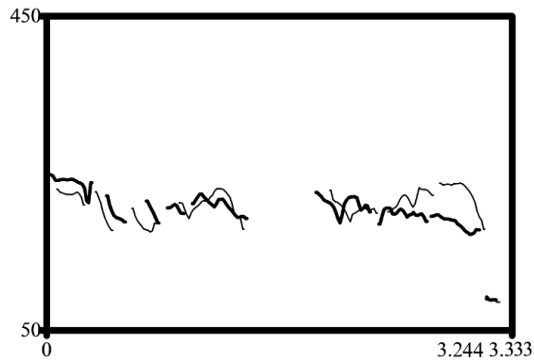


図 14 IB のピッチ曲線 (細線が情動型、太線が単純肯定型)

4. おわりに

本論の巻頭において、発話者が「正しいドイツ語」を使ったとしても、音調的な部分が正しくないともメッセージが聞き手に十分に伝達されず、意思疎通に支障をきたすと述べた。筆者は日本人ドイツ語学習者のドイツ語教授法を視野に据えているが、日本人が「正しい音」を把握するには、ドイツ語の母語話者から学習することが実践的である。本論は、文を構成する単語の辞典的意味の集合体から忠実に生成される表現 (それを「単純型」と定義した) に、更なる特定の感覚・感情により語用論的な付加価値が含意された表現 (それを「情動型」と定義した) を、

イントネーションの視点から検証した。そこに現れたイントネーションは情動に応じて、インフォーマントの間で統一的で固定的なピッチ曲線像が描かれたであろうか。

表1 任意の情動に現れた特徴的なイントネーションの一部

	憤懣	不満・不信	驚き	冗談・皮肉
ピッチレンジが広い	8/16 ○	25/88 ○	6/12 ◎	8/46 ▽
ピッチレンジが狭い	2/16	17/88 ▽	3/12	18/46 ◎
ピーク型	6/16 ▽	14/88	6/12 ◎	6/46
ピッチピークが高い	11/16 ◎	31/88 ◎	5/12 ○	13/46 ○

表1は、縦軸にイントネーションの様態から主要な4カテゴリー、横軸に任意に選択した情動を例示して、各サンプルの総数に占める例数を数量表示した。◎○▽は頻出度のトップ3を表す。例えば、憤懣の情動で最多はピッチピークが高いで、16例中の11例を占める。サンプル数が最大の情動型である不満・不信は、ピッチピークが高いが88例中の31例の約35%である。これを共有度が高いとみなすのか、それとも総数の3分の1に過ぎないとみなすのか、その議論は無益であると繰り返し強調した。◎○▽がどの情動にも目立つため、いかにも発話者間の共有度が高い、あるいは、当該の情動に普遍的性格があるかのように印象づけられる。しかしピッチレンジ1つ見ても広さ・狭さで分極しているのであり、ましてや、ピッチの上昇と下降は上表に記載できないほど、発話者間並びに当該情動内で多極化する。すなわち、表1からは「イントネーションの実態はばらばらである」という測定結果が示されたことになる。しかし、筆者の解釈は異なる。イントネーションの実態を一部抜き書きした上記の表1は算出された数字にすぎない。一見、発話者間並びに当該情動内に「共通の傾向」は認められない。しかし、発話された各情動のサンプルはイントネーションが無秩序でも非調和でもない。発話者個人が各サンプルに付与したピッチ曲線の「傾向」は、秩序と調和で有機的に価値づけることのできる必然性で「共通」するのである。発話者間で「共通の傾向」がサンプル文の過半において見られないのは自然であり、問うべきは「異質の傾向」を生起させる基盤である。イントネーションは主に3つの基盤が織りなして実現する。「文法」、「音」、そして「個性」である。「文法」とは言語学が唱える統語論、意味論、さらに語彙論までも協働させるところの「正しい言葉」を構築する規則の総体である。「音」とは、同じく言語学が主唱する音(Laut)に関わる一切の表象であり、本論の巻頭の用語を使うとプロソディの全体系である。最後の「個性」とは結局、その人であり、それ以外の人で代替できない性質や性格、特性の融合体である。他人とのコミュニケーションに際しての慣習的態度や対人上の距離感、さらには人生哲学的な習性になる非言語的要素である。全く同じ文が同じ情動で発話されたのに、人によりイントネーション

ンに開きが生じるのは「個性」の要因が大きい。非言語的要素の「個性」は、言語要素の「音」に関与しても、ピッチ曲線の表面的な数値に顕在化されにくい。3つの基盤が発話者に瞬時に働きかけるとき、イントネーションが発話者の間で「共通」しないのは当たり前である。当人内においても、同じ発話文を違う環境では異なる「音」で生成するに違いない。本質的に問われるべきは、ドイツ語の母語話者が情動に応じて実現させたイントネーションの動態を検証し、それを身に着ける努力をすることである。その際に、記録されなかったピッチ曲線のイントネーションを避けること、そのことで無秩序と無調和な音調整を自己流に実現しないことが重要である。本稿では、日本人ドイツ語学習者のドイツ語教授法において、重要な着眼点と新たな課題を見出せた。

注

1. B群における情動のカテゴリーは、Roland (2002:137) の分類を一部参考にした。
2. サンプル文は映画の字幕を参考にディクテーションした。和訳はコンテキストを考慮に入れ筆者が行った。
3. 音声は EDIROL R-09 (Roland) で録音。音声分析プログラムとして praat (<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>) を使用し、サンプリング周波数 48KHz、24bit で量子化したのちピッチを計測した。本稿のインフォーマントはすべて女性であるため、女声のグラフは 50Hz から 450Hz が割り当てられている。
4. ドイツ・ヘッセン州の小都市。
5. ピッチピークの遅れとはピークが本来あるべき音節よりも後続音節に移る現象である。ダウンステップとは後続する音節の高さが低めに実現する現象である (成田 2007: 49)。

参考文献

- 成田克史. 2007. 「ドイツ語話者と日本語話者によるドイツ語読み上げ文におけるイントネーションの特徴」『音声研究』第 11 卷第 2 号: 40-54. 東京: 日本音声学学会
- Delattre, Pierre. 1965. *Comparing the Phonetic Features of English, French, German and Spanish. An Interim Report*. Heidelberg: Julius Gross.
- Féry, Caroline. 1993. *German Intonational Patterns*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Grice, Martine, Stefan Baumann and Ralf Benz Müller. 2005. German Intonation in Auto-segmental-Metrical Phonology. In Sun-Ah Jun (ed.), *Prosodic Typology. The Phonology of Intonation and Phrasing*. New York: Oxford University Press.
- Kästner, Erich. 1931. *Pünktchen und Anton*. Hamburg: Oetinger Taschenbuch.
- Roland, Kehrein. 2002. *Prosodie und Emotionen*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

映画

Caroline Link 監督 1998, *Pünktchen und Anton*, 制作会社 Bavaria, Lunaris, ZDF.

Kai Wessel 監督 2009, *HILDE*, 制作会社 Egoli Tossell, MMC Independent.

Intonation in German Speech with Different Emotions

Akiko Tominaga

This study focused on how pitch contours in German speech correlate with different emotions of the speaker, because intonation contributes not only to communicating certain information but also to expressing a speaker's emotions. It is obvious that speakers express their emotions with the proper intonation well integrated into their speech. A total of 324 samples were extracted from two films and were read aloud by two female native speakers. The samples were analyzed in terms of nine emotions: anger, indifference, discontent, surprise, expectation, enforcement, contentment, confidence, and risible irony. The analysis of all the pitch contours reveals that those samples with certain emotion display characteristic intonation patterns such as a wide pitch range, a narrow pitch range and a high pitch peak. For example, when uttered with anger or discontent, the utterances have a remarkable tendency toward a wide pitch range and a high pitch peak; on the contrary, when uttered with enforcement, they have a barely unified tendency. However, both of the speakers tend to use different pitch patterns in each emotion category. This finding does not mean that the functions of intonation of each speaker show a lack of order. Instead, a proportionally realized voice with intonation due to sentences spoken with any emotion stands in a natural appearance of similarity on the one hand, and difference on the other. The important point is that a certain intonation is realized under the joint influence of the three factors of grammar, sound, and personality. What is then required is to verify the intonation dynamics which are articulate by German native speakers according to various emotions.